

## 2010年10月「基礎教学試験」の教材

### 基礎教学試験について

新たなアメリカSGI教学プログラムの一環として、本年10月から毎年、「基礎教学試験」を実施することになりました。これは、2005年度より例年実施してきた「教学レビュー」と同様に各地区単位に実施されます。主な相違点は、教学レビューが自己採点であったのに対し、「基礎教学試験」では解答用紙が回収、採点されます。参加者は、電子読解式の解答用紙に解答を記入し、試験担当者に提出したあと、ディスカッションに参加します。

「基礎教学試験」の教材は以下のとおりです。

#### 第1部 基礎仏法用語

1. 信行学
2. 十界
3. 宿命転換
4. 三障四魔
5. 南無妙法蓮華経
6. 御本尊
7. 功德

#### 第2部 日蓮大聖人の御生涯

#### 第3部 勝利の経典「御書」に学ぶ

1. 佐渡御書（上） 「最極の生命を仏法のために使う」
2. 佐渡御書（中） 「生命の鍛錬こそ最高の功德」
3. 兄弟抄（下） 「『心こそ大切』の勝利の人生を」

#### 第4部 創価スピリット 日顕宗の邪義を破す

### 基礎教学試験に関するQ & A

Q：受験できる人は？

A：すべてのアメリカSGIメンバーが受験できます。今年の試験に合格した人は、2011年4月に実施される「一般教学試験」を受験することができます。不合格の方は、2011年10月の基礎教学試験を受けられます。

Q：受験の準備として学習すべき教材は？

A：この試験のための教材は、すべて本紙に収録されています。英文は、2010 *Introductory Exam Study Guide* を会館ブックストアでお求めください（\$2.00）。また、ウェブサイト [sgi-usa.org](http://sgi-usa.org) にも掲載されています。

Q：試験問題の様式は？

A：全部で20問、すべて正誤選択式です。

Q：試験は他の言語でも受験可能ですか？

A：はい、受験できます。詳しくは各言語グループの担当者にお問い合わせください。

## 【第1部 基礎仏法用語】

### 1. 信行学

#### 諸法実相抄 信心を根本に行学の実践を

行学の二道をはげみ候べし、行学たへなば仏法はあるべからず、我もいたし人をも教化候へ、行学は信心よりをこるべく候、力あらば一文一句なりともかたらせ給うべし（御書 1361 鈔）

本抄は、文永10年（1273年）5月17日、日蓮大聖人が52歳の時に佐渡の一谷で著され、最蓮房日浄に送られた御抄です。

この御文は、「信行学」という仏法実践の根本について述べられている本抄の結論部分にあたる箇所です。

まず、御本尊への強盛な信心を根幹として、「行学の二道」に励んでいくことが肝要であると仰せです。「行」とは自行・化他にわたって南無妙法蓮華経の題目を唱えていくことであり、「学」とは、大聖人の御書を根本に仏法の法理を学んでいくことです。

「行学たへなば仏法はあるべからず」と仰せのように、いかに外形が立派な寺院などの建物があつたとしても、行学の実践がないところには、もはや仏法は存在していないのです。

また「我もいたし人をも教化候へ」と仰せの通り、行の実践は自行だけでは

なく、化他にわたるものでなければなりません。化他を行わないのは、一切衆生を救おうとする仏の心に背くからです。

そして、「行学は信心よりをこるべく候」と仰せです。真の信心は行学の実践に表れるのであり、心で信じていれば行学を行わなくてもよいというのは、間違いです。さらに「力あらば一文一句なりとも語らせ給うべし」と仰せのように、自分の力の及ぶ限り、少しでも仏法を語っていこうと努力していくことが大切であり、大聖人のお心にかなった実践なのです。

池田SGI会長は、このように指導しています。

「ただ、お経を読んでいれば信仰なのではない。口がうまいとか、指導ができるとか、それが信仰なのでもない。本当の信仰者とは、どんなことがあっても、大聖人の仰せの通りの『信行学』の実践を最後の最後まで貫いていく人である。広宣流布へ戦い抜く人である。これが、大聖人の仏法の真髓の行動である」(2001年1月 本部幹部会)

「信行学」の実践の道を踏みはずすのは易しいことで、はじめのうちは自由な雰囲気を楽しんでいるように見えますが、結局、自己中心、自己満足に陥り、妙法のリズムから離れていってしまいます。各自が間違いなく自己の成長と幸せ、そして広宣流布の前進へ向かっていくために、SGIという組織があるのです。法華経に説かれた通り、大聖人が仰せの通りに実践している団体が私たちのSGIです。SGIの同志と共に日蓮仏法の弘通に励んでいくなかに、自己の成長があり、一生成仏が叶うのです。

(*World Tribune* 12/19/08 日本語版 09年1月1日付)

## 2. 十界 (じっかい) 境涯を変革する指針

「十界」とは、生命の境涯を十種に分類したもので、仏法の生命観の基本となるものです。十界の法理を学ぶことによって、生命の境涯を的確にとらえ、各人がそれぞれの境涯を変革していく指針を得ることができます。

「十界」それぞれの名を挙げれば、**地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人界・天界・声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界**です。

このうち地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天をまとめて「六道」、声聞・縁覚・菩薩・仏をまとめて「四聖(ししょう)」といいます。「六道」は、インド古来の世界観を仏教が用いたもので、もともとは生命が流転する世界を六つに大別したものです。また「四聖」は仏道修行によって得られる境涯です。

法華経以外の經典では、地の下に地獄があると説いたり、遠く離れた所に浄

土（清らかな国土）を求めるなど、十界は全く別々に存在する世界としてとらえられていました。

しかし法華経では、その考え方を根本的に破り、十界は固定的な別々の世界としてあるのではなく、一個の生命に具わる十種の境涯であることを示したのです。したがって、十界のいずれか一界の姿を現している生命にも十界がすべて具わっており、他の界の境涯をも現しうることが明らかになります。これを十界互具といいます。

日蓮大聖人は、「浄土と云うも地獄と云うも外には候はず・ただ我等がむねの間にあり、これをさとるを仏といふ・これにまよふを凡夫と云う」（御書 1504 鈔、通解——仏の清らかな国土といっても地獄といっても外の所にあるのではありません。ただ我々の胸の間にあるのです。このことを悟るのを仏といい、このことに迷うのを凡夫というのです）と述べられています。

生命に十界がすべて具わっているということは、たとえ今の自分が地獄の苦しみの生命であっても、仏界の大歓喜の生命へと変革していくことができるということです。このように法華経に基づく十界論は、自身の生命を変革できることを示す原理となります。



### ① 地獄界（じごくかい）

地獄は、もともとは「地下の牢獄」という意味で、経典には八熱地獄、八寒地獄など数多くの地獄が説かれています。

地獄界は、苦しみに縛られた最低の境涯です。「地」は最底を意味し、「獄」は拘束され、縛られた不自由さを表します。

「地獄おそるべし炎を以て家とす」（同 1439 鈔）といわれるように、地獄界とは、自身を取り巻く世界全体を、炎のように自身に苦しみを与える世界と感じる境涯といえます。

また、大聖人は、観心本尊抄で「瞋（いか）るは地獄」と仰せです。「瞋り」とは、思い通りにいかない自分自身や、苦しみを感ぜさせる周りの世界に対して抱く、やり場のない恨みの心です。苦の世界に囚われ、どうすることもできない生命のうめき声が瞋りです。いわば「生きていること自体が苦しい」、「何を見ても不幸を感じる」境涯が地獄界です。

また破壊衝動に駆られて、自分と他者を壊していくことも地獄界の生命といえるでしょう。人間の苦しみの極限である戦争は、まさに地獄界の生命の表れにほかなりません。

### ② 餓鬼界（がきかい）

餓鬼界とは、欲望が満たされずに苦しむ境涯です。

餓鬼のもともとの意味は「死者」のことです。死者が常に飢えて食物を欲しているとされていたことから、とどまるところを知らぬ激しい欲望の火に身も心も焼かれていく生命状態を餓鬼界と表現します。

大聖人は「餓鬼悲むべし飢渴にうへて子を食ふ」(同 1439 ㊦)、「**貧るは餓鬼**」と仰せです。飢えて子まで食べるというような貪り、すなわち際限のない欲望にふりまわされ、そのために心が自由にならず、苦しみを生じる境涯のことです。

もちろん、欲望そのものには善悪の両面があります。人間は、食欲などの欲望がないと生きていられないことも事実です。また、欲望が人間を進歩、向上させるエネルギーとなる場合もあります。しかし、欲望を創造の方向に使えず、欲望の奴隷となって苦しむのが餓鬼界です。

### ③ 畜生界 (ちくしょうかい)

畜生という言葉は、もともとは獣や鳥などの動物を指します。畜生界の特徴は、目先の利害にとらわれ、理性が働かない「愚かさ」です。大聖人は「癡(おろか)は畜生」と説かれています。正邪・善悪の判断がつかず、本能のままに行動してしまう境涯です。

また「**畜生の心は弱きをおどし強きをおそる**」(同 957 ㊦)「畜生は残害とて互に殺しあふ」(同 1439 ㊦)といわれるように、畜生界の生命は、理性や良心を忘れ、自分が生きるためには他者をも害していく弱肉強食の生存競争に終始していく境涯です。目先のことしか見えず、未来を思考できない愚かさの故に、結局は、自己を破滅させ、苦しむのです。

(畜生との表現は古代インドの表現を踏襲したものです。動物であっても例えば盲導犬のように人を助けることを使命として生きる例もあります。また逆に人間であっても、戦争のように他の動物よりも残酷な行為をする場合もあります)

地獄界・餓鬼界・畜生界の三つは、いずれも苦悩の境涯なので「三悪道」といいます。

### ④ 修羅界 (しゅらかい)

修羅とは、もともとは阿修羅といい、争いを好むインドの神の名です。

自分と他者を比較し、常に他者に勝ろうとする「勝他の念」を強くもっているのが修羅界の特徴です。

他人と自分を比べて、自分が優れて他人が劣っていると思う場合は、慢心を起こして他を軽んじます。そして、他者の方が優れていると思う場合でも、他者を尊敬する心を起こすことができません。また、本当に自分よりも強い

ものと出会ったときには、卑屈になってへつらうものです。

自分をいかにも優れたものに見せようと虚像をつくるために、表面上は人格者や善人をよそおい、謙虚なそぶりすら見せることもありますが、内面では自分より優れたものに対する妬みと悔しさに満ちています。このように内面と外面が異なり、心に裏表があるのも修羅界の特徴です。

故に、大聖人は「**諂曲（てんごく）なるは修羅**」と説かれています。「諂曲」とは「諂（へつら）い」「曲がった」心のことで、「諂」も「曲」も「心が曲がっている」ことです。「諂い」とは、具体的には「自分の本心を見せないで従順をよそおう」ことです。

この修羅界は、貪瞋癡（とんじんち）の三毒（貪り、瞋り、癡という三つの根本的な煩惱）にふりまわされる地獄・餓鬼・畜生の三悪道と異なり、自我意識が強い分だけ三悪道を超えているといえます。しかし、根本は苦しみを伴う不幸な境涯なので、三悪道に修羅界を加えて「**四悪趣**」ともいいます。

#### ⑤ 人界 （にんかい）

人界は、穏やかで平静な生命状態にあり、人間らしさを保っている境涯をいいます。大聖人は「**平らかなるは人**」と仰せです。

この人界の特質は、物事の善悪を判断する理性の力が明確に働いていることです。大聖人は「賢きを人と云いはかなきを畜といふ」（同 1174 ㊦）とされています。善悪を判別する力を持ち、自己をコントロールできる境涯です。

この人間らしい境涯も、決して努力なしに持続できるものではありません。

実際に、悪縁が多い世間にあつて、人間が「人間らしく生きる」ことは難しいものです。それは、絶え間なく向上しようとする自分の努力がなければ不可能です。いわば人界は「自分に勝つ」境涯の第一歩といえます。

また人界の生命は「**聖道正器（しょうどうしょうき）**」といわれ、仏道（聖道）を成ずることができる器であるとされています。

人界は悪縁にふれて悪道に堕ちる危険性もある半面、修行に励むことによって四聖への道を進むことができる可能性をもっているのです。

#### ⑥ 天界 （てんかい）

天界の天とは、インドにおけるもともとの意味は、地上の人間を超えた力を持つ神々のこと、また、それらが住む世界という意味です。インドでは、今世で善い行いをした者は来世に天に生まれると考えられていました。

仏法では、天界を生命の境涯の一つとして、欲望を満たした時に感じる喜びの境涯として位置づけています。大聖人は「**喜ぶは天**」と仰せです。

欲望といってもさまざまです。睡眠欲や食欲などの本能的欲望、新しい車や家が欲しいというような物質的欲望、社会で地位や名誉を得たいという社会的欲望、未知の世界を知ったり、新たな芸術を創造したいというような精神的欲望などがあります。それらさまざまな欲望が満たされ、喜びに浸っている境地が天界です。

しかし、天界の喜びは永続的なものではありません。時の経過とともに薄らぎ、消えてしまいます。ですから天界は目指すべき真実の幸福境涯とはいえないのです。

## 六道から四聖へ

以上の地獄界から天界までの六道は、結局、自身の外の条件に左右されています。環境に左右されているという意味で、六道の境涯は本当に自由で主体的な境涯とはいえないのです。

これに対して、その六道の境涯を超え、環境に支配されない主体的な幸福境涯を築いていこうとするのが仏道修行です。そして仏道修行によって得られる境涯が声聞、縁覚、菩薩、仏の四聖の境涯です。

⑦ 声聞界 (しょうもんかい)

⑧ 縁覚界 (えんかくかい)

声聞界と縁覚界の二つは、仏教のなかでも小乗教の修行で得られる境涯で、この声聞界と縁覚界とをまとめて「二乗」と呼びます。

声聞界とは、仏の教えを聞いて部分的な悟りを獲得した境涯をいいます。これに対して、縁覚界は、さまざまな事象を縁として、自らの力で仏法の部分的な悟りを得た境涯です。

二乗の部分的な悟りとは「無常」を悟ることです。無常とは万物が時間の推移とともに変化・生滅することをいいます。自分と世界を客観視し、世間すなわち現実世界にあるものがすべて時とともに変化・生滅するという真理を自覚し、無常のものに執着する心乗り越えていくのが二乗の境涯です。

私たちも、日々の生活の中で、自分自身を含めて万物が無常の存在であることを強く感ずることがあります。ゆえに大聖人は「世間の無常は眼前に有り豈人界に二乗界無からんや」(同 241 頁)と言われ、人界に二乗界が具わっているとされたのです。

この二乗の境涯は、仏教のなかでも小乗教が理想としたもので、二乗の境涯を得た小乗教の聖者は、無常のものに執着する煩惱こそ苦しみの原因であるとして、煩惱を滅しようとしてきました。しかし、そのために自分自身の心身のすべてを生滅させるという誤った道(灰身滅智=けしんめっち)に入って

しまいます。

二乗が得た悟りは、仏の悟りから見れば、あくまでも部分的なものであり、完全なものではありません。しかし、二乗はその低い悟りに安住し、仏の眞実の悟りを求めようとしません。師匠である仏の境涯の偉大さは認めていても、自分たちはそこまで到達できると考えず、自らの低い悟りにとどまってしまうのです。

また、二乗は自らの悟りのみにとらわれ、他人を救おうとしないエゴイズムに陥っています。

このように、「自分中心」の心があるところに二乗の限界があります。

### ⑨ 菩薩界 (ぼさつかい)

菩薩とは、仏の悟りを得ようとして不断の努力をする衆生という意味です。二乗が仏を師匠としていても、自分たちは仏の境涯には至れないとしていたのに対し、菩薩は、師匠である仏の境涯に到達しようと目指していきます。

また、仏の教えを人々に伝え弘めて人々を救済しようとしています。

すなわち、菩薩の境涯の特徴は、仏界という最高の境涯を求めていく「求道」とともに、自らが仏道修行の途上で得た利益を、他者に対しても分かち与えていく「利他」の実践があることです。

現実の世間のなかで、人々の苦しみと悲しみに同苦し、抜苦与樂の実践をして、自他ともの幸福を願うのが菩薩の心です。

二乗が「自己中心」の心にとらわれて低い悟りに安住していたのに対して、菩薩界は「人のため」「法のため」という使命感をもち、行動していく境涯です。

この菩薩界の境涯の根本は「慈悲」です。大聖人は、観心本尊抄で「**無顧の悪人も猶妻子を慈愛す菩薩界の一分なり**」(同 241 頁)と仰せです。他人を顧みることのない悪人ですら自分の妻子を慈愛するように、生命には本来、慈悲が具わっています。この慈悲の念を万人に向け、生き方の根本にすえるのが菩薩界です。

### ⑩ 仏界 (ぶつかい)

仏界は、仏が体現した尊極の境涯です。

仏(仏陀)とは覚者の意で、宇宙と生命を貫く根源の法である妙法を覚った人のことです。具体的にはインドで生まれた釈尊などです。また、さまざまな経典に阿弥陀如来などの種々の仏が説かれていますが、これは仏の境涯の素晴らしさを一面から譬喩的に示した架空の仏です。

日蓮大聖人は、末法の一切衆生を救うために、一個の人間として御自身の

生命に仏界の境涯を顕し、一切衆生の成仏の道を確立された末法の御本仏です。

仏界とは、自身の生命の根源が妙法であると悟ることによって開かれる、広大で福德豊かな境涯です。この境涯を開いた仏は、無上の慈悲と智慧を体現し、その力で一切衆生に自分と等しい仏界の境涯を得させるために戦い続けます。

仏界は、私たちの生命の中にも本来、具わっています。ただ、それを現実の生命に現すことが難しいので、大聖人は人々が仏界の生命を現していくための方途として御本尊を御図顕されました。

「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、……日蓮が・たましひは南無妙法蓮華經に・すぎたるはなし」(同 1124 頁) と仰せのように、御本尊に末法の御本仏・日蓮大聖人の仏界の御生命が顕されているのです。そして、その真髓が南無妙法蓮華經です。私たちは御本尊を信じて自行化他にわたる唱題に励むときに、胸中の仏界を現すことができるのです。

仏界の生命と信心との深い関係について大聖人は、観心本尊抄で「末代の凡夫出生して法華經を信ずるは人界に仏界を具足する故なり」(同 241 頁) と言われています。法華經は万人が成仏できることを説く教えですが、その法華經を信ずることができるのは、人間としての自分の生命の中に本来、仏界が具わっているからです。

また、この大聖人の仰せを受けて日寛上人は「法華經を信ずる心強きを名づけて仏界と為す」と述べています。

この法華經とは末法の法華經である御本尊のことで、御本尊を信じて生き抜く「強い信心」そのものが仏界にほかならないということです。

この仏界の境涯を現代的に言うならば、何ものにも侵されることのない「絶対的な幸福境涯」といえましょう。戸田第2代会長は、仏界の境涯について「生きていること自体が幸福であるという境涯」と述べています。

また仏界の境涯は、しばしば師子王に譬えられます。どのような状況下でも師子王のように恐れることのない、真の安心立命の境涯であるといえます。

(*Living Buddhism*, May-June 2009, pp. 87-94, 大白蓮華 07 年 10 月号 81-87 頁)

### 3. 宿命転換 幸福への希望の法理

人類を宿命の苦悩から救ったのが日蓮大聖人の仏法です。まず仏教一般の立場を説明しましょう。

仏教では、自分自身の善悪の行為が自身の命に刻まれて因（原因）となり、未来の果（結果）が定まるという、因果による業思想を説きます。

本来、この「業（カルマ）」には、善と悪の両方があるのですが、仏教で問題となるのは、主として悪業の方です。

過去世から現在に至るまで、自身が悪業を積み重ねてきた結果として、現在受けている悪の報い——それが仏法で説く「宿業」「宿命」です。

一般に仏教で説く宿業論は、因果応報——すなわち、悪因があれば悪果があり、善因があれば善果があるとする考え方です。したがって、幸福になるためには、自分がこれまでに犯した一つ一つの悪業の報いを受け、それらをすべて消し去らなければなりません。

日蓮大聖人は、「過去に法華経の実践者を軽んじ、尊くすぐれた経典である法華経をあざけり、あなどった」（御書 960 ㊦、趣意）ことが一切の悪業の根源であると述べます。

すなわち、妙法という「生命の根源の法」を信じられない不信や迷い（無明）こそが、宿業の根源であると説きます。したがって、「生命の根源の法」に則って仏界を涌现し、不信や迷いを克服することで、一切の宿業を転換できるのです。

大聖人は「地獄の苦みばつときへて」（同 1000 ㊦）とも仰せです。永遠に続くであろう地獄の苦しみを、直ちに消していけるのです。

例えば、夜中にきらめく星々も、太陽が昇れば、私たちの目には見えなくなります。

それと同様に、深い信によって妙法の太陽が胸中に昇れば、その陽光の前に、それまでの一切の宿業は“問題にならないくらいちっぽけなもの”としてかすんでしまうのです。

宿業のない人などいません。大切なのは、目の前に宿業が立ちはだかったときに、そこから逃げるのではなく、真正面から捉えて、どこまでも信心を根本にさらなる前進を開始することです。

大聖人は、「鉄は炎打てば剣となる」（同 958 ㊦）、「くろがねをよくよくきたへばきずのあらわるるがごとし」（同 1083 ㊦）と仰せです。

熱い鉄を何度も鍛え打ち、不純物を出すことで強靱な剣ができあがる。

同様に、私たちも苦難を避けることなく立ち向かい、乗り越えることで“何ものにも負けない確固たる自己”を築くことができるのです。

草創以来、多くの学会員が、広布の活動に励むなかで、自らの宿業を転換し、何にも揺るがぬ幸福境涯を築きました。まさに学会活動こそ、あらゆる宿命を転換し、生命を鍛錬する最高の舞台です。

“目の前の苦悩や課題が大きければ大きいほど、自身の人生を大きく変えて

いける” との大確信で、学会とともに宿命転換の大道を堂々と歩もうではありませんか。

(*Living Buddhism*, January-February 2010, pp. 97-99, 聖教新聞 07 年 5 月 18 日付)

#### 4. 三障四魔 仏道修行を妨げる働き

日蓮大聖人は、「四季の変わり目には変化があるように、凡夫が成仏するとき、必ず三障四魔が競う」（御書 1091 鈔、趣意）と仰せです。その三障四魔とは、三つの「障り」と四つの「魔」です。大聖人は「摩訶止観」（第 5 卷）を引いてこう記されています。

「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず」（同 1087 鈔、通解＝仏法の実践と理解に励んでいくなら、必ず三障四魔がさまざまな姿で紛らわしく競い起こる。しかし、それらに決して随ってはならない。また、恐れてはならない）

船も止まっていると静かですが、航海に出ると波浪に遭います。飛行機も進むと空気抵抗を受けます。

同様に、仏道修行が進んでいくと、それを止めようとする働きがあります。つまり、障魔は人間革命が進み、宿命転換がなされている証拠なのです。そして、「紛らわしく」——魔と分かりにくいのが特徴です。

「三障」の「障」とは、「さわり」という意味です。まず「煩惱障」とは、貪（むさぼ）り・瞋（いか）り・癡（おろか）などの煩惱によって起こる障りです。自身の欲望や感情に突き動かされて、仏道修行を怠ってしまうことです。

二つ目の「業障」の「業」とは「行為」のことで、自身の悪い行い（五逆罪、十悪業など）によって起こる障りです。

最後の「報障」の「報」とは「報い」のことです。正法を非難するなどの、過去世の悪い行為の「報い」として、三悪道に墮ちることなどからくる障りです。

「四魔」の「魔」は、「智慧の命を奪う者」「功德を奪う者」などの意味で、仏法を実践する人の内面から、生命の輝きを奪おうとする働きのこと。「陰魔」「煩惱魔」「死魔」「天子魔」の四つです。

最初の「陰魔」とは、心身の働き（＝五陰）が不調になり、仏道修行が妨げられること。「煩惱魔」とは、貪瞋癡などの煩惱によって信心が破壊されること。平たく言うと、体調を崩して（陰魔）、あるいは欲望に負けて（煩惱魔）勤行・唱題を忘れたり、活動

から離れたりすることなどです。

次に、「死魔」は、生命そのものを奪い、仏道を妨げる働きです。また、他の修行者の死を見て、動揺することも「死魔」です。

「天子魔」は、「他化自在天子魔」の略で、人を思いのままに操ることを喜びとする「第六天の魔王」の働きです。最も本源的な魔であり、その本体は、「元品の無明（根本の暗さ、迷い）」で、あらゆる力を使って信心修行に圧迫を加えてきます。

実は、「三障四魔」といっても、第六天の魔王がさまざまに働かせていたのです（同 1081 頁）。私たちはこれらの障魔に屈することなく、乗り越え、進み続ける「信心」が大切になるのです。

仏法は仏と魔の絶え間ない闘争です。

釈尊も成道するとき、魔が競いました。後、教団が大きくなると、バラモン等の勢力から、さまざまな弾圧があったのです。

一人、仏道修行に挑んだ天台の観念観法とは異なり、社会のまっただ中で仏道修行に励む門下に競う「三障」について、日蓮大聖人は具体的、実践的に記されています。すなわち、「業障」を、夫あるいは妻、また子からの妨げ、と（同 1088 頁）。

「報障」を自分で選択できない「父母」と並べて「主君」からの迫害（同 頁）に。現在でいえば、政治権力をもつ人からの迫害もこれにあたりましょう。

「第六天の魔王……或は国王の身に入って法華經の行者ををどし」（同 1082 頁）と、第六天の魔王が国家権力を使って弾圧する、と記されています。

私たちは権力の魔性を鋭く見破り、信仰を妨げようとする蠢動を打破していかなくてはなりません。

宿命転換、人間革命の勝負時は、三障四魔が競い起こったときです！

「必ず三障四魔と申す障いできたれば賢者はよろこび愚者は退く」（同 1091 頁）とあるように、決して引くのではなく、喜んでこれに立ち向かい、魔を乗り越えていくとき、大きく境涯を開くことができるのです。

（*Living Buddhism*, March-April 2010, pp. 88-90, 聖教新聞 08 年 11 月 20 日付）

## 5. 南無妙法蓮華經 崩れぬ幸福境涯を開く根本の法

### 南無妙法蓮華經とは

釈尊が説いた最高の經典である「法華經」の題目は「妙法蓮華經」と呼ばれ

ます。古代インドの言葉（梵語＝サンスクリット語）では「妙法蓮華經」は「サ・ダルマ・フンダリキヤ・ソタラン」と発音していました。4世紀中国の著名な学僧で翻訳家である鳩摩羅什（くまらじゅう）が法華經の題目の意味をもれなく汲み取って「妙法蓮華經」と訳したのです。

日蓮大聖人は、妙法蓮華經を単なる經典の題目としてでなく、極めて重要な意義を覚知されていたのです。妙法蓮華經の上に「南無」を加えられたことに重要な意味があります。「南無」とは、サンスクリット語の「ナマス」という音を漢字で表したもので、漢字に意味はありません。「ナマス」とは「帰依する、帰命する」、つまり命を捧げる、それほど大事に敬うということです。

大聖人は「帰命」について「帰と云うは迹門不変真如の理に帰するなり命とは本門随縁真如の智に命くなり」（御書 708 ㊦）と仰せられています。妙法を根本にしたとき、いかなる変化にも対応できる真実の智慧に基づいた人生を確立できるということです。

また大聖人は「南無とは梵語・妙法蓮華經は漢語なり梵漢共時に南無妙法蓮華經と云うなり」（同 708 ㊦）と仰せです。つまり、南無妙法蓮華經の教えは、特定の言語や文化に限られたものではないとの仰せであると拝せます。大聖人御在世当時の13世紀日本では、梵語（サンスクリット語）は西欧文明の言語・文化を代表するもので、漢語は東洋文明の言語・文化を代表すると言えます。東西の言語が合体することによって、南無妙法蓮華經は全人類にとって普遍的な音声を表す言葉になったのです。

大聖人は法華經に説かれた通りに実践され、民衆の幸せのために妙法の弘通に全生涯をかけられました。その結果、法華經に予言された通り、生命にも及ぶ厳しい迫害に遭われたのです。この意味で、大聖人は法華經を“身読”され、御自身が生命の真理であり宇宙の根本法である妙法蓮華經と一体不二であることを悟られたのです。そのことを「経王殿御返事」に「仏の御意は法華經なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華經に・すぎたるはなし」（同 1124 ㊦）と仰せになっています。

大聖人は全人類のために御自身の生命に妙法を具現されたが故に、「末法の御本仏」と呼ばれるのです。

### 南無妙法蓮華經の意味

大聖人が「御義口伝」に「妙とは法性なり法とは無明なり無明法性一体なるを妙法と云うなり」（同 708 ㊦）と仰せのように、「妙法」の2文字は、「仏の悟りの生命」と「凡夫の迷いの生命」を表していて、同時に、この2つが一体であることを示しています。

ほとんどの仏教宗派は、仏と凡夫には大きな隔たりがあると説きますが、日蓮仏法では両者の間の差異を否定します。例えば、「生死一大事血脈抄」で次のように明言されています。「然れば久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華経と我等衆生との三つ全く差別無しと解りて妙法蓮華経と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり」（同 1337 鈔）

また「妙は死法は生なり」（同 1336 鈔）、更に「一生成仏抄」には「有無に偏（へん）して中道一実の妙体にして不思議なるを妙とは名くるなり、此の妙なる心を名けて法とも云うなり」（同 384 鈔）と仰せです。つまり「妙法」とは、生の生命、死の生命ともに一貫して具わる生命の本質を表しているのです。

「蓮華」とは、原因と結果がつねに一体であること、つまり「因果具時」の原理を表しています。「御義口伝」には「因果一体なり」（同 708 鈔）と仰せです。「因」とは成仏を目指す修行、「果」とは成仏の果ということです。「因果具時」とは、私たちが南無妙法蓮華経と唱えた瞬間に、勇気、慈愛、智慧に満ちた仏界の生命が涌現するという意味です。

最後に「経」とは文字通り、仏が説いた教えということです。大聖人は「御義口伝」に「経とは一切衆生の言語音声を経と云うなり、釈に云く声仏事を為す之を名けて経と為すと」（同 708 鈔）と仰せです。私たちが唱題し、また他の人に南無妙法蓮華経について語っていくとき、その音声が自己のまた他の人の仏性に共鳴し、仏界の生命を呼び覚ましていくのです。

このほか南無妙法蓮華経とは、いろいろ説明の仕方がありますが、私たちににとっては、この妙法に帰命する、つまり妙法を根本に、自他ともの幸せと成長を願って実践するという意味が重要になってきます。

南無妙法蓮華経は、正法・像法時代の論師、人師によって知られてはいましたが、それは自行のためだけであったのに対し、大聖人は「末法に入て今日蓮が唱る所の題目は前代に異り自行化他に亘りて南無妙法蓮華経なり」（同 1022 鈔）と仰せになっています。

## 唱題の心構え

大聖人の仏法においては、“実践”がもっとも大切です。日々の真剣な行動のなかにこそ、南無妙法蓮華経の真価が現されることを銘記しましょう。それは、私たち自身の人間性、功德、人生勝利の実証として輝いてくるのです。

大聖人は、「ただ心こそ大切なれ」（同 1192 鈔）と「心」つまり「信心」がもっとも大切であると強調されています。私たちが自他ともの幸福を願いつつ、各自がもつ無限の可能性を信じて唱題していくとき、必ずや妙法の偉大な力用を確信するに違いありません。

池田 SGI 会長は、次のように語っています。

「人生の成功と失敗、楽しみと苦しみの境は、いったい、何によるのか？それは複雑であり、微妙である。しかし、南無妙法蓮華経は、『絶対勝利』の法である。『常楽我浄』の悠然たる長者の生命となりゆく仏法なのである。南無妙法蓮華経を持つことは、いかなる財宝を持ち、大邸宅を持つよりも、ずっとずっと裕福なのである。南無妙法蓮華経は、大宇宙の生命であり、根源の法である。それを唱えているのだから、何の心配もない。日蓮大聖人の仰せには、絶対に嘘はないのである。幸福と勝利のための我らの信仰であり、信心である。永遠唯一の御本仏あられる大聖人の仏法の実体である」(2010年2月6日 本部幹部会)

池田 SGI 会長の指揮のもと、大聖人の仰せの通り、広宣流布（南無妙法蓮華経を世界に弘通すること）に献身しているのは私たち SGI メンバーだけであり、全人類のため、その功德力の見事な実証を示しているのです。

(*Living Buddhism*, May-June 2010, pp.80-85)

## 6. 御本尊

### 仏界の境涯を涌現

多くの同志が心に刻んできた有名な御文に「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ」(御書 1124 鈔) とあります。

「本尊」という言葉は、「根本尊敬」を略したものとされています。宇宙の根本法である南無妙法蓮華経を、曼荼羅として顕されたものが御本尊です。私たちが御本尊に向かい、南無妙法蓮華経と唱えるとき、自身の生命に妙法の力用である仏界の境涯を涌現することができるのです。

全ての宗教はそれぞれの本尊を立てています。多くの場合、神や超自然的な対象物です。仏教の各宗派は、伝統的に仏と仏の教えを崇拜します。しかし、仏の概念と教えの内容は、宗派によって大きく異なります。例えば、釈尊はもともと民衆の苦を救い、成仏に導くために献身した、いわば普通の人間だったのです。ところが釈尊の滅後、人々は釈尊を神格化し、拝む対象としたのです。多くの宗派は釈尊の仏像や画像をつくり、民衆が仏の救いを求めて礼拝するように仕向けていきました。

これに対し、日蓮大聖人は、「若し己心の外に法ありと思はば全く妙法にあらず麤法(そほう)なり」(同 383 鈔) と仰せになり、仏や法が自分の生命の外に存在すると思えば、それは妙法でなく劣った教えであり、仏界の生命という自

己の偉大な可能性を発揮することは不可能であると説かれています。

### 生命を映し出す明鏡

仏や法を生命の外にあるものとして崇拝するのと対照的に、中国の天台大師は「観心」という観念観法を成仏への修行としました。天台の法門では、一切衆生に成仏の可能性があると認めています。その修行法は複雑で生活に追われる一般の民衆には到底、実践不可能なものでした。

日蓮大聖人は、誰にも内在する仏性を呼び覚ませ、涌現させるという実践法を明かされたのです。それが、御本尊に向かい南無妙法蓮華経と唱えていくことです。成仏とは、単に「心の状態」をいうのではなく、精神、肉体、振る舞いを含む総合的な生命境涯をいいます。天台による「心を観る」という内省の修行は、成仏へのごく部分的な方法でしかありません。

大聖人は、私たちの仏性を映し出すための「明鏡」として御本尊を顕されたのです。池田SGI会長は、次のように語っています。

「鏡は、目に見える顔や姿を映す。仏法の鏡は、見えない生命をも映し出す。鏡は、反射の法則など光の法則を応用して、姿が映るように工夫した、人間の知恵の成果である。御本尊は『宇宙』と『生命』の法則に基づいて、“汝自身”の実相を見つめ、成仏できるようにした、仏の『智慧』の究極であられる」（「親愛なるアメリカの友へ」125頁）

大聖人は御本尊についてこう明言されています。

「此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱うる胸中の肉団におはしますなり」（御書 1244頁）

### 大聖人の勝利の御境涯

大聖人は幼少のころから世の悲惨をなくし、民衆を幸福に導きたいとの燃えるような決意を抱かれています。大聖人はこの誓願のもと、あらゆる経典を学び尽くされた結果、南無妙法蓮華経こそ釈尊の教えの真髄であると悟られたのです。弘教を進めるなかで、大聖人は多くの厳しい迫害を乗り越えていきました。なかには命にも及ぶ難が幾度かありました。

竜の口の法難の後、佐渡に流罪された大聖人は御本尊を書き顕され、信心強盛な門下に授与されていきます。このことに関して、大聖人は「三沢抄」にこうおしたためになっています。「我につきたりし者どもにまことの事をいわざりけるとをもうて・さどの国より弟子どもに内内申す法門あり」（同 1489頁）

大聖人は相次ぐ激しい迫害にすべて勝利され、後世の弟子たちが自分と同じ

境涯を涌現できるようにと、御自身の勝利の生命を一幅の曼荼羅として顕されたのです。大聖人は「経王殿御返事」にこう仰せになっています。

「日蓮守護たる処の御本尊を・したため参らせ候事も師子王に・をとるべからず、経に云く『師子奮迅之力』とは是なり、又此の曼荼羅能く能く信ぜさせ給うべし、南無妙法蓮華経は師子吼の如し・いかなる病さはりをなすべきや」(同 1124 頁)

### 宝塔・虚空会の儀式

法華経の「見宝塔品第 11」で、巨大な宝塔が地下から出現し虚空に屹立する様子が描かれています。大聖人は、この宝塔とは人間生命の偉大な可能性を示したものであると説かれます。(「阿仏房御書」1304 頁参照)

この宝塔の出現に続き、「虚空会の儀式」が展開されていきます。儀式には全宇宙のいたる所から集った諸仏、菩薩ほかあらゆる大衆が参列しています。仏は神通力をもって、儀式の大衆をすべて虚空に持ち上げ、宝塔の前に陣列させた後、法を説き始めました。

大聖人は、この「虚空会の儀式」を御本尊の「相貌」(そうみょう=姿)として用いられました。宝塔を表す南無妙法蓮華経は、御本尊の中央にしたためられています。木像や絵像では、仏のすべてを表現しきることはできないため、大聖人は御自身が悟られた妙法と一体不二である生命境涯を表現するために、文字を用いられて御本尊を御図顕されたのです。

池田SGI会長は、「それゆえ(木像や絵像は)決して、南無妙法蓮華経という因行果徳をすべて具足した根本法を表し尽くすことはできません。色心の二法のうち、心は言葉で表せます」と語っています。(「御書の世界」第2巻 224 頁)

### 不惜身命の信心

誰もが生命の内奥に偉大な可能性を秘めているということは、ほとんどの人が合意しますが、すべての人々や生き物についてこの原理を本当に信じられるかとなると、さほど容易ではないようです。大聖人は、誰もが自己の仏界の生命を涌現することができるよう、御本尊を顕されたのです。しかし、ただ御本尊を受持するだけでは、それは叶いません。力強い仏界の生命の涌現を可能にするのは、信心と自行化他の実践です。

大聖人は「日女御前御返事」にこう仰せになっています。

「此の御本尊も只信心の二字にをさまれり以信得入とは是なり(中略)南無

妙法蓮華經とばかり唱へて仏になるべき事尤も大切なり、信心の厚薄によるべきなり仏法の根本は信を以て源とす」(同 1244 ㊦)

### 法華弘通のはたじるし

大聖人は同じく「日女御前御返事」に、「竜樹天親等・天台妙楽等だにも顕し給はざる大曼荼羅を・末法二百余年の比はじめて法華弘通のはたじるしとして顕し奉るなり」(同 1243 ㊦)と仰せられています。今日まで、SGIは創価三代会長(牧口常三郎、戸田城聖、池田大作)の指導によって、「法華弘通のはたじるし」と大聖人が仰せのとおり御本尊を根本に、人類の平和と幸福を目指して堂々と妙法広布に前進してきました。

それゆえ、創価三代会長の精神のままに御本尊に南無妙法蓮華經と唱え、広宣流布へのSGI活動に励むメンバーは、大きな功德と福德を積み、輝かしい人生勝利を勝ち取っていただけるのです。

(*Living Buddhism*, May-June 2010, pp.86-89)

## 7. 功德

日蓮大聖人の仏法の実践の功德は、私たちの生命を磨き、境涯の変革をもたらしますが、その功德の実証は、現実の人生における幸福と充実感に満ちた勝利の結果として現れます。また同時に、その人の人間としての振る舞いや人間性の上に現れるべきものです。

### 顕益・冥益

日蓮仏法の実践による功德には、「顕益」と「冥益」があります。顕益とは、目に見えて、はっきりと分かる功德を言います。それは経済的な利益、病気の克服、就職などさまざまです。冥益とは、すぐに目に見える結果として現れなくても、長い間、地道に信心を続けていった時、生命の境涯が大きく変わり、苦境に負けない強い自分になっていくことです。

大聖人はこう仰せです。「南無妙法蓮華經と心に信じぬれば心を宿として釈迦仏懷まれ給う、始はしらねども漸く月重なれば心の仏・夢に見え悦こばしき心漸く出来し候べし」(御書 1395 ㊦)

また、池田SGI会長は次のように述べています。

「木の成長は、毎日見ているとわからない。しかし、5年、10年たてば、その成長は歴然である。それと同じように、目には見えないが、広宣流布のために勇んで行動すれば、必ず最高の生命となり、永遠の幸福を勝ち取っていただける。これが冥益である。一生のうちに、揺るぎない幸福の人生を築くことができるのである」(聖教新聞 2002年9月11日付)

「冥益」とは、言い換えれば「人間革命」の行程であると言えます。

大聖人は「教行証御書」に「今末法には初めて下種す冥益なるべし」(同 1277 頁)と、末法における仏道修行の功德は「冥益」が根本であると仰せになっています。したがって最も大事なことは、南無妙法蓮華經を信受することによって目覚めた仏性の“種子”を、日々の信心と実践を通して育てていくことです。時が経つにつれて、仏界の境涯は自己の生命に深く根付いていき、その豊かな功德、福德を満喫していくことは間違いありません。

## 変毒為薬

日蓮仏法の功德についてもう一つの見方は、「変毒為薬」という法理に示されます。これは、端的に言えば、苦しみ、悩みの生命を希望と歓喜に満ちた生命へ転換するということです。2世紀から3世紀にインドで活躍した大乘の論師である竜樹は、「妙法蓮華經」の「妙」について、「偉大な医師が、毒をもって薬と為すようなものである」(同 944 頁、通解)と説明し、また中国の妙楽大師は「治し難いものをよく治すゆえに妙というのである」(同 944 頁、通解)と述べています。

つまり、妙法の力用とは、絶望を無限の希望に変え、苦悩を歓喜と充実に変え、不運を福運に変えていくことであると論じているのです。

上記の竜樹の言葉について、大聖人はこう仰せです。「毒と云うは何物ぞ我等が煩惱・業・苦の三道なり薬とは何物ぞ法身・般若・解脱なり、能く毒を以て薬と為すとは何物ぞ三道を変じて三徳と為すのみ・・・即身成仏と申すは此れ是なり」(同 984 頁)

大聖人は、「毒」とは「煩惱・業・苦」の三道に縛られた生命であると仰せです。「煩惱」とは、貪(むさぼ)り、瞋(いか)り、癡(おろ)か、慢心などの心の次元の迷い。「業」とは、煩惱に基づく身・口・意の行いと、行ったことによって自分の生命に残る悪い影響力。「苦」とは、煩惱と業の結果としてもたらされる苦しみの報いです。

誰しも苦は避けたいものですが、生命の本質を知らずに苦を減じようとしても逆に愚かな行動に走れば、さらに悪い業を重ねていくこととなります。この煩惱・業・苦を繰り返して、不幸から不幸へ、悪から悪へと流転する生命が「毒」

で譬えられます。

しかしながら、妙法を信じ実践するとき、あたかも偉大な医師が毒をもって薬をつくるように、私たちは自身の煩惱や苦悩を幸福への因に変えていくことができるのです。つまり、煩惱・業・苦の三道（毒）に流転する凡夫の生命が、そのまま妙法の力で「法身・般若・解脱」の三徳（薬）の働きを具えた絶対的幸福境涯へと転じていくのです。

「法身」とは、永遠の真理と一体の永遠の生命です。「般若」とは、仏の悟りの智慧のことです。「解脱」とは、エゴや執着や束縛から解放された自在で広々とした仏の境涯です。

## 六根清浄

大聖人はまた功德とは「六根清浄（ろっこんしょうじょう）」であると説かれています。「御義口伝」の「法師功德品四箇の大事」で、「功德とは六根清浄の果報なり、所詮今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は六根清浄なり、されば妙法蓮華経の法の師と成つて大なる徳（さいわい）有るなり」（同 762 頁）と仰せです。

「六根清浄」とは、私たちの生命全体が浄化されることです。六根とは、眼・耳・鼻・舌・身・意、すなわち外界を認識する感覚器官であり、「根」とは、その感覚器官が持っている能力を意味します。つまり、六根清浄とは、六根の本来もっている能力が、最大限に発揮されることで、人間としての成長、充実につながっていくのです。

## 悪を滅し善を生ずる

「御義口伝」に「悪を滅するを功と云い善を生ずるを徳と云うなり」（同 762 頁）と仰せです。仏法では、人間の生命に等しく善と悪が存在するとして、その悪の根源を無知であると説きます。つまり、私たちの生命それ自体が、あらゆる生命と宇宙の根本法たる妙法であるということへの無知です。自分自身や他の人々の生命に内在する仏性を認めることができないのです。その「根源的な無知」を「元品の無明」といい、それが貪・瞋・癡などの煩惱の温床となり、不幸を招いていくのです。

池田 S G I 会長は、「元品の無明」について、次のように述べています。

「（元品の無明は）最も認識しがたい迷いであり、正体不明であるがゆえに、知らないうちに、私たちの生命において悪の力を持つようになる。また、あらゆる生命に具わるものであるがゆえに、自他の生命に暗い衝動を現します」（大

白蓮華 08 年 7 月号、三沢抄講義)

「しかし、この元品の無明は、強力な悪の力を持っているとはいえ、その正体は、結局は『無知』であるがゆえに、『智慧』によって必ず打ち砕くことができるのです。その智慧をあらわした人が『仏』です。その最極の智慧を教える法が『正法』です。釈尊の法華経や日蓮大聖人の三大秘法の南無妙法蓮華経が、この『正法』の意義を持つことは言うまでもありません」(同)

「私たちは、この正法を信ずる『信』をもって仏の『智慧』に代え、凡夫でありながら、元品の無明を破る力は、『智慧』であり、『信』であり、『心の力』に他ならないのです」(同)

したがって、自身のもつ仏性を信じ、題目を唱えていくなれば、ちょうど灯火が暗闇を照らすように、己心の元品の無明を克服することができるのです。

### 究極は人の振る舞いに

大聖人が「教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ」(同 1174 頁)と仰せのように、仏法実践の真の功德は、私たちの振る舞い(全人格的行動)の中に表れるものです。自身の仏性が人間性、行動の輝きとして現れるとき、私たちは真の幸福を実感するばかりか、他の人々の人間性をも触発していくのです。こうして尊敬と思いやりの波動が周囲にどこまでも拡大していくのです。

(*Living Buddhism*, May-June 2010, pp.90-94)

## 【第 2 部 日蓮大聖人の御生涯】

日蓮大聖人の御生涯——それは、全人類の不幸を根絶し、すべての人々に仏の境涯を開かせたいとの誓願と慈悲に貫かれた妙法弘通の御一生でした。そして、民衆の幸福を阻む一切の悪を責め抜き、大難につぐ大難の御生涯でもありました。

<パート 1 >

### (1) 御聖誕・出家・遊学

日蓮大聖人は、貞応元年(1222年)2月16日、安房国長狭郡東条郷の片海(現在の千葉県鴨川市小湊)という漁村で誕生されました。漁業で生計を立てる庶民階層の出身でした。

12歳で安房国の清澄寺に入って、いわば初等教育を受けられました。

そのころ大聖人は「日本第一の智者となし給へ」（御書 888 頁）との願いを立てられました。父母、そして民衆を救うために、生死の根本的な苦しみを乗り越える仏法の智慧を体得しようとされたのです。そこで大聖人は、仏法を究めるために出家を決意します。16歳の時、清澄寺の道善房を師匠として得度しました。

このころ、「明星の如くなる智慧の宝珠」（同頁）を得られたと述べられています。これは、全仏法の根底と言うべき「妙法」についての智慧といえます。

大聖人は鎌倉・京都・奈良等の各地の諸大寺を巡る遊学を開始し、一切経を精読するとともに、各宗派の教義の本質を検証していかれました。その結果として、法華経こそが仏教のすべての經典のなかで最も勝れた經典であり、御自身が悟った妙法は法華経の肝要の法である南無妙法蓮華経であることを確認されました。そしてこの南無妙法蓮華経を末法の人々を救う法として弘める使命を自覚されました。（「末法」とは、釈尊の仏法が救済の力を失う時代のことで、当時の一般の説では、釈尊が入滅してから 2000 年以後とされます）。

## (2) 立宗宣言

遊学によって妙法弘通の使命とその方途を確認された大聖人は、大難が起こることを覚悟のうえで、妙法弘通の実践に踏み出すことを決意されました。

そして、**建長 5 年（1253 年）4 月 28 日の「午の時」（正午ごろ）、清澄寺で、念仏などを破折するとともに、南無妙法蓮華経の題目を高らかに唱えて末法の民衆を救済する唯一の正法を宣言されました。これが「立宗宣言」です。立宗とは宗旨（肝要の教義）を立てることです。御年 32 歳でした。この時、みずから「日蓮」と名乗られました。**

この立宗宣言の際に念仏宗の独善的な教義を厳しく批判した大聖人に対し、地頭・**東条景信**は念仏の強信者であったために激しく憤りました。そして、大聖人の身に危害を加えようとしたましたが、大聖人は無事、その難を免れました。

鎌倉に出られた大聖人は名越の松葉ヶ谷に草庵を構えて、弘教を開始されました。当時、鎌倉に広まって人々に悪影響を与えていた念仏宗や禅宗の誤りを破折しながら、南無妙法蓮華経の題目を唱え、弘められました。

その弘教により、**富木常忍・四条金吾・池上宗仲**らが入信しました。

## (3) 立正安国論の提出と法難

大聖人が鎌倉での弘教を開始された当時、毎年のように、異常気象や大地震

等の天変地異が相次ぎ、大飢饉・火災・疫病（伝染病）などが続発していました。

特に、正嘉元年（1257年）8月に鎌倉地方を襲った大地震は、鎌倉中の主な建物をことごとく倒壊させる大被害をもたらしました。

大聖人はこの地震を機に、世の不幸の根本原因を明らかにし、それを根絶する道を世に示すため、駿河国（現在の静岡県中央部）にある岩本実相寺で一切経を閲読されました。その時、日興上人が大聖人の弟子となっています。

そして大聖人は**立正安国論**を著され、**文応元年（1260年）7月16日**、時の実質的な最高権力者であった**北条時頼**に提出されました。これが大聖人による最初の**国主諫暁**です。

立正安国論では、天変地異が続いている原因は国中の人々が正法に背いて邪法を信じていることにあり、その元凶は法然が説き始めた念仏にあると指摘されています。

そして、人々が悪法への帰依を止めて正法を信受するならば平和楽土が現出するが、悪法への帰依を続けるならば経文に説かれている三災七難等の種々の災難のうち、まだ起こっていない**自界叛逆難**（内乱）と**他国侵逼難**（他国からの侵略）の二つの災難が起こるであろうと警告し、速やかに正法に帰依するよう諫められました。（三災七難とは、穀貴〈飢饉のこと〉・兵革〈戦争のこと〉・疫病〈伝染病がはやること〉の3種の災いと、星宿変怪難〈星の運行が乱れること〉・非時風雨難〈季節はずれの風雨の災害が起こること〉などの7種の難をいいます）。

しかし、幕府要人は、大聖人の至誠の諫暁を無視しました。それだけでなく、念仏者たちは幕府要人の内々の承認のもとに大聖人への迫害を図ってきたのです。

**文応元年（1260年）8月27日の夜**、念仏者たちが、大聖人を亡き者にしようと松葉ヶ谷の草庵を襲いました（**松葉ヶ谷の法難**）。

幸い、この時は大聖人は難を逃れ、一時、鎌倉を離れることになりました。

**翌・弘長元年（1261年）5月12日**、幕府は鎌倉に戻られた大聖人を捕らえて、伊豆の伊東へ流罪に処しました（**伊豆流罪**）。

弘長3年（1263年）2月、伊豆流罪を赦免（罪を許されること）されて鎌倉に帰られた大聖人は、翌年、病気の母を見舞いに郷里の安房方面に赴かれます。

**文永元年（1264年）11月11日**、大聖人の一行は、天津の工藤吉隆邸へ向かう途中、地頭・東条景信の軍勢に襲撃されました。この時の戦闘によって、門下の鏡忍房と工藤吉隆が死亡しただけでなく、大聖人も額に傷を負い、左の手を折られました（**小松原の法難**）。

#### (4) 竜の口の法難と発迹頭本

文永5年(1268年)、蒙古からの国書が鎌倉に到着しました。そこには、蒙古の求めに応じなければ、兵を用いるとの意が示されていました。立正安国論で予言した他国侵逼難が現実のものとなってきたのです。

そこで大聖人は時の執権・北条時宗をはじめとする幕府要人や鎌倉諸大寺の僧たち、あわせて11カ所に対して書状(十一通御書)を送り、公の場での対決を迫りました。

しかし、幕府も諸宗も、大聖人の働きかけを黙殺しました。それどころか、幕府は大聖人の教団を危険視し、その弾圧を検討していたのです。

この頃、蒙古調伏の祈禱を行う真言宗が影響力を増してきました。また、真言律宗の極楽寺良観が幕府と結び付いて大きな力を持ちはじめました。大聖人は、民衆と社会に悪影響を与えるこれら諸宗に対しても、一步も退かず破折を開始します。

文永8年(1271年)に大旱魃が起こった時、極楽寺良観が、祈雨(雨乞い)の法を修することになりました。そのことを聞かれた大聖人は、良観に申し入れをされました。

それは、もし良観が7日のうちに雨を降らせたならば、大聖人が良観の弟子となり、もし雨が降らなければ、良観が法華経に帰伏せよ、というものでした。

その結果は、良観の祈雨の法が行われた最初の7日間、雨は一滴も降らず、良観はさらに7日の日延べを申し入れて祈りましたが、それでも雨は降らないばかりか、暴風が吹くというありさまで、良観の大敗北となりました。

しかし、良観はみずからの敗北を素直に認めず、大聖人に対する恨みをさらにつのらせ、配下の念仏僧の名で大聖人を訴えたり、幕府要人やその夫人たちに働きかけて、権力による弾圧を企てました。

良観は、当時の人々から仏法を極めた高僧として崇められていました。しかし、実際には権力と結託して、私欲を貪っていたのです。

9月10日、大聖人は幕府から呼び出されて、侍所の所司(侍所は軍事・警察を担当する役所。所司は次官のこと、長官は執権が兼務)である平左衛門尉頼綱の尋問を受けました。

この時、大聖人は平左衛門尉に対して仏法の法理のうえから、国を安んじていく一国の指導者のあるべき姿を説いて諫められました。

2日後の文永8年(1271年)9月12日、平左衛門尉が武装した兵士を率いて松葉ヶ谷の草庵を襲い、大聖人は謀叛人のような扱いを受けて捕らえられました。この時、大聖人は、平左衛門尉に向かって“日本の柱”である大聖人を迫害するならば、必ず自界叛逆・他国侵逼の二難が起こると述べて、強く諫暁さ

れました（第2回の国主諫暁）。

大聖人は、何も取り調べがないまま、夜半に鎌倉のはずれにある竜の口に連行されました。平左衛門尉らが、内々で大聖人を斬首することを謀っていたのです。しかし、まさに刑が執行されようとしたそのとき、突然、江ノ島の方から“まり”のような大きな光ものが夜空を北西の方向へと走りました。兵士たちはこれに怖じ恐れて、刑の執行は不可能となりました（竜の口の法難）。

この法難は、大聖人御自身の一代の弘教のうえで極めて重要な意義をもつ出来事でした。すなわち、大聖人は竜の口の法難を勝ち越えた時に、凡夫の迹（仮の姿）を開いて、御胸中に久遠元初自受用報身如来という本地（本来の境地）を顕されたのです。これを「発迹顕本」（迹を開いて本を顕す）といいます。

この発迹顕本以後、大聖人は末法の御本仏としてのお振る舞いを示されていきます。そして、万人が根本として尊敬し、帰依していくべき曼荼羅御本尊を御図顕されていきました。

## <パート2>

### （5）佐渡流罪

幕府では竜の口での処刑に失敗してから大聖人への処置が定まらず、約1カ月間、大聖人は相模国の依智（現在の神奈川県厚木市北部）にある本間六郎左衛門（佐渡国の守護代）の館に留め置かれました。

結局、佐渡流罪が決まり、大聖人は、文永8年（1271年）10月10日に依智を出発し、11月1日に佐渡の塚原という墓地にある荒れ果てた三味堂（葬儀用の堂）に入りました。そこでは、厳寒の気候に加えて、衣類や食料も乏しい中、佐渡の念仏者から命を狙われるという状態でした。

他方、弾圧は鎌倉の門下にも及び、土牢に入れられたり、追放、所領没収などの処分を受けます。そして、多数の門下が臆病と保身から大聖人の仏法に疑いを起こして退転してしまいました。

翌文永9年（1272年）1月16日、17日には、佐渡だけでなく北陸・信越等から諸宗の僧など数百人が集まり、大聖人に法論を挑んできましたが、大聖人は各宗の邪義をことごとく論破されました（塚原問答）。

2月には北条一門内部の同士打ちが起こり、鎌倉と京都で戦闘が行われました（二月騒動）。大聖人が竜の口の法難の際に予言された自界叛逆難が、わずか150日後に現実になったのです。

同年初夏、大聖人の配所は、塚原から一谷に移されましたが、念仏者たちに命を狙われるという危険な状況に変わりはありませんでした。

この佐渡流罪の間を通して、日興上人は、大聖人に常随給仕して苦難をともにされました。また、佐渡の地でも、**阿仏房・千日尼**夫妻をはじめ大聖人に帰依する人々が現れてきました。

大聖人は、この佐渡の地で多くの重要な御書を著されていますが、とりわけ重要な著作が開目抄と観心本尊抄です。

文永9年2月に著された**開目抄**は、日蓮大聖人こそが末法の衆生に対して主師親の三徳を具えられた末法の御本仏であることを明かされているところから、「**人本尊開頭**の書」といわれます。

また文永10年(1273年)4月に著された**観心本尊抄**は、末法の衆生が成仏のために受持すべき南無妙法蓮華経の本尊について説き明かしており、「**法本尊開頭**の書」といわれます。

文永11年(1274年)2月、大聖人は赦免され、3月に佐渡を発って鎌倉へ帰られました。4月に平左衛門尉と対面した大聖人は、蒙古調伏の祈禱を邪法によって行っている幕府を強く諫めるとともに、平左衛門尉の質問に答えて、蒙古の襲来は必ず年内に起こると予言されました (**第3回の国主諫暁**)。

この予言の通り、同年10月に蒙古の大軍が九州を襲ったのです (**文永の役**)。

これで、立正安国論で示された自界叛逆難・他国侵逼難の二難の予言が二つともの中したことになりました。

このように、幕府を直接に諫暁して、二難を予言し的中させた御事跡は、これで3度目になります(1度目は立正安国論提出の時、2度目は竜の口の法難の時)。日蓮大聖人は「余に三度のかうみようあり」(287頁)と述べられています (**三度の高名**)。

## (6) 身延入山

3度目の諫暁も幕府が用いなかったため、日蓮大聖人は甲斐国(現在の山梨県)波木井郷の身延山に入ることを決意されました。身延の地は、日興上人の教化によって大聖人の門下となった波木井六郎実長が地頭として治めていました。

大聖人は、文永11年(1274年)5月に身延に入られました。しかし、大聖人の身延入山は、決して隠棲などではありませんでした。

身延において大聖人は撰時抄、報恩抄をはじめ、数多くの御書を執筆されて、大聖人の仏法の重要な法門を説き示されました。特に、**三大秘法**(本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目)を明らかにされました。

さらに、法華経の講義などを通して未来の広布を担う人材の育成に全力を注がれました。また、多くの御消息文(お手紙)を書かれ、在家信徒一人ひとりの信心を激励し、各人が人生の勝利と成仏の境涯が得られるよう指導を続けら

れました。

## (7) 熱原の法難

日蓮大聖人の身延入山後に、駿河国（現在の静岡県中央部）の富士方面では、日興上人が中心となって折伏・弘教が進められ、天台宗などの僧侶や信徒が、それまでの信仰を捨てて大聖人に帰依するようになりました。

そのために、天台宗寺院による迫害が始まり、大聖人に帰依した人々を脅迫する事件が次々に起こりました。

弘安2年（1279年）9月21日には、熱原の農民信徒20人が無実の罪を着せられて逮捕され、鎌倉に連行されました。農民信徒は平左衛門尉の私邸で拷問に等しい取り調べを受け、法華経の信心を捨てるよう脅されましたが、全員がそれに屈せず、信仰を貫き通しました。

そして、神四郎・弥五郎・弥六郎の3人の兄弟が処刑され、残りの17人は居住する地域から追放されました（10月15日、一説には翌年4月8日）。この弾圧を中心とする一連の法難を「**熱原の法難**」といいます。

農民信徒たちの不惜身命の姿に、大聖人は、民衆が大難に耐える強き信心を確立したことを感じられて、10月1日に著された聖人御難事で立宗以来、「二十七年」目にして、「**出世の本懐**」を遂げられたと宣言されました。「出世の本懐」とは、仏がこの世に出現した目的という意味です。

そして、弘安2年（1279年）10月12日に一閻浮提総与の大御本尊を建立されたのです（一閻浮提総与とは全世界の人々に授与するとの意）。

熱原の法難における、民衆の強き信心に呼応して御図顕された弘安2年の大御本尊は、全民衆救済という日蓮大聖人の大願を込めて、広宣流布のために顕されたのです。

また、この法難においては、大聖人門下が異体同心で戦いました。特に、21歳の青年・南条時光は同志を守るなど活躍しました。

## (8) 日興上人への付嘱と御入滅

弘安4年（1281年）11月、身延に大坊が完成し、久遠寺と名づけられました。

弘安5年（1282年）9月、大聖人は御一代に説き弘められた法門のすべてを日興上人に付嘱し、広宣流布の使命と責任を託されました（身延相承）。

9月8日、大聖人は、弟子たちの勧めで常陸国（現在の茨城県北部と福島県南東部）へ湯治に行くため、9年間住まわれた身延山を発ちました。そして、武蔵国池上（現在の東京都大田区）にある池上宗仲の屋敷に滞在し、後事について

明確に定められたのです。

9月25日には、病を押して、門下に対し、立正安国論を講義されました。

弘安5年(1282年)10月13日、大聖人は御入滅に先立って再び日興上人へ付嘱され、日興上人を身延山久遠寺の別当(住職)と定められました(池上相承)。

同日、日蓮大聖人は、池上宗仲邸で61歳の尊い生涯を終えられたのです。

(Living Buddhism, March-April 2009, pp. 40-45, May-June 2009, pp. 34-39;  
大白蓮華 07年10月号 74頁~80頁)

### 【第3部 池田SGI会長講義 勝利の経典「御書」に学ぶ】

#### 第1回 佐渡御書(上)

##### 最極の生命を仏法のために使う

世間の法にも重恩をば命を捨て報ずるなるべし又主君の為に命を捨る人はすくなきやうなれども其数多し男子ははぢに命をすて女人は男の為に命をすつ、魚は命を惜む故に池にすむに池の浅き事を歎きて池の底に穴をほりてすむしかれども魚にばかされて釣をのむ鳥は木にすむ木のひきき事をおじて木の上枝にすむしかれども魚にばかされて網にかかる、人も又是くの如し世間の浅き事には身命を失へども大事の仏法などには捨る事難し故に仏になる人もなかるべし(956頁8行目~957頁1行目)

本抄の冒頭には、思いがけない事故や事件、あるいは戦乱などに巻き込まれて命を落とすことを通して、あらためて、誰もが自分の身命を大切にしていることが説かれます。しかし、その一方で、世間の倫理観・価値観に従って、あえて自らの命を捨てることも少なくないと指摘されています。

それとともに、命を大切にしているつもりで、結果として愚かにも捨ててしまう場合も多い。ここで示されている魚と鳥の習性は、大聖人が読まれた『貞観政要』などにも説かれる先人の洞察です。「餌にばかされて」とは、せっかく自分のために、あれこれ用心していながら、目先の欲望に突き動かされたり、狭い料簡から判断を誤ったりして、結局、身を滅ぼしてしまうことを譬えています。現代も、こうした「人間の愚かさ」は全く変わらないと言わざるを得ません。

だからこそ、大聖人は、「世間の浅き事」のために命を捨てるのではなく、「大

事の仏法」のためにこそ一番大事な「身命」を捧げるべきであると教えられているのです。

「不惜身命」といっても、真実の仏法は、いたずらに命を捨てる「殉教主義」などでは断じてありません。牧口先生、戸田先生、そして私は、「尊い学会員から一人の殉教者も出さずに広宣流布を進めていこう。そのために自分の身が犠牲になることは本望だ」との覚悟で行動してきました。これからも、これが創価学会の代々の会長の精神であらねばならない。

皆さんは、尊い命を絶対に無駄にはいけない。青少年の皆さんも、どんなに辛いことや苦しいことがあったとしても、それに負けて自分や他人の命を粗末にするようなことが絶対にあってはならない。皆さまの命は、何ものよりも尊極な、不思議なる仏の生命だからです。

それでは、それほど大切な命を「大事の仏法」に捧げるとは、具体的に、どのような実践をしていけばよいのでしょうか。

大聖人は、末法の凡夫成仏の在り方を次のように教えてくださっています。

「ただし仏になり候事は凡夫は志ざしと申す文字を心へて仏になり候なり」  
(1596 巻、白米一俵御書)

ここに究極の不惜身命論があります。末代の凡夫は、雪山童子のように身を投げるのがなくとも、「志ざし」によって「不惜身命」の実践をするのと同じ功德を得ることができると、力強く御断言されているのです。

「心こそ大切」です。仏法のために、正義のために「一念に億劫の辛勞を尽くす」ことです。私たちにとって「不惜身命」とは、恐れなく南無妙法蓮華經を唱え抜くことであり、世界のため、未来のため、人々のために、懸命に信心の実証を示しきっていくことに尽きるのです。

牧口先生は、この生き方を「不自借身命の大善生活法」と呼ばれました。

大善生活法とは、独善や臆病を乗り越え、自他共の幸福に尽くすことです。そして、これは「一度意識的に実証され、誰れにでもできることが解って見ると、最早誰れでも仕たくてたまらぬ、仕なければならぬ平凡の生活法であり、人並みの人間道である」。

ゆえに、「創価教育学会（＝創価学会）は直ちに大善生活の生きた実証」であると牧口先生は主張されました。

すなわち、「不惜身命」は、“誰でもできる” 平凡に見える日常生活のなかにこそあるのです。

要するに、私たちが日々、広宣流布のために心身を使って、大勢の人を励まし、心を尽くして仏法の素晴らしさを語っている行動のなかにこそ、「不惜身命」の実像があるのです。

(*Living Buddhism*, November-December 2009, pp.54-55, 大白蓮華 09年 1

## 第2回 佐渡御書（中）

### 生命の鍛錬こそ最高の功德

鉄は炎打てば劍となる賢聖は罵詈して試みるなるべし、我今度の御勘気は世間の失一分もなし偏に先業の重罪を今生に消して後生の三悪を脱れんずるなるべし (958 ㊦ 14行目～16行目)

宿命転換の仏法を実践する急所を教えられている一節です。

わが生命の鍛錬こそが、最高の功德です。鍛え抜かれた生命が、永遠の幸福を約束するのです。「世間の失一分もなし」——社会的罪など、全くない。ただただ、流罪は今世における宿命転換のためにあったとまで仰せです。

わが生命を鍛え、変革しゆくための仏法です。

私たちは皆、「自分の幸福の鍛冶屋」(ショーロホフ) なのです。

わが弟子よ、鋼となれ！ 劍となれ！ 真実の賢人・聖人として立ち上がれ！

大聖人は、苦闘する門下の肩を揺さぶるように励まされているのです。

「宿命を転換するのは自分自身だ。自分の中に、その力がある！」

「苦難を避けるな。本当の勝利は、自分自身に勝つことだ！」

「大いなる悩みは大いなる自分をつくる！ 永遠の勝利者となれる！」と。

(*Living Buddhism*, November-December 2009, pp. 71-72, 大白蓮華 09年2月号 53-54 ㊦)

## 第6回 兄弟抄（下）

### 「心こそ大切」の勝利の人生を

心の師とは・なるとも心を師とせざれとは六波羅蜜經の文なり。

設ひ・いかなる・わづらはしき事ありとも夢になして只法華經の事のみさはぐらせ給うべし (1088 ㊦ 15行目～16行目)

「心こそ大切なれ」(1192 ㊦) です。

「心こそ大切に候へ」(1316 ㊦) です。

「心」には、生命に無上の尊極性を開く力があります。一方で、無明につき動かされ墮落するのも「心」です。したがって「心」の変革こそが一切の根幹となります。

その時に、凡夫の揺れ動く自分の「心」を基準にしては、三障四魔の烈風が吹く険しき尾根を登ることはできません。絶対に揺るがない成仏の山頂を見据えて、「心の師」を求め抜くしかありません。それが「心の師とは・なるとも心を師とせざれ」との一節です。

「心の師」——断固として揺れ動くことのない不動の根拠とは「法」しかありません。したがって、「法」を悟り弘める仏の説き残した「経典」が大事になります。私たちで言えば、「御本尊根本」「御書根本」の姿勢が「心の師」を求めることになります。

そして、「法」と私たちを結びつけるのが、仏法実践の「師匠」の存在です。自分中心の慢心ではなく、師弟不二の求道の信心に生き抜くことが「心の師」を求める生き方にほかなりません。

そして、どこまでも「心の師」——「法」を根本として生き抜くことを示されているのが次の一節です。

「たとえ、心を煩わせる、どのようなことがあっても、夢と違って、ただ法華経のことだけに専念していきなさい」

いかなる事象も、永遠という壮大なスケールから見れば、すべて一時の夢の出来事にすぎない。「法」は永遠の存在です。ゆえに、三障四魔に敗れて「法」から離れてしまえば永遠の後悔を残してしまう。ただ「法華経の事のみ」、ただ広宣流布を見つめて、永遠の勝利のために信仰を貫いていきなさいとの仰せです。

現代において、「只法華経の事のみ」という「心の師」を求める生き方を堅実に歩んできた学会員は皆、見事に勝利の実証を示しています。日本中、世界中に庶民の信心の英雄は数多くおられます。その方たちこそ、「広宣流布の宝」です。また、「人類の宝」です。「法」を根幹として、また「師弟不二」に徹して、自身の宿命を転換し、何ものにも揺るがぬ幸福境涯を確立されています。同時に、社会の繁栄、世界の平和のために尽力し、自他共の幸福の実現という無上の人生を歩む。この宝の如き学会員を、日本だけでなく世界中の知性も賞讃する時代に入りました。

(*Living Buddhism*, March-April 2010, pp. 75-76, 大白蓮華 09年6月号 50-52  
ページ)

## 【第4部 創価スピリット 日顕宗を破す】

### 宗門事件の背景

創価三代会長の強盛な信心と使命感によって、創価学会は大きく発展を遂げていきました。戦後、数十年にわたる創価学会の真心の支援により、何百という末寺が建立され、大石寺も完全に新しく整備されるに至ったのです。また、創価学会は、著しく形式主義に傾き、権力体質をあらわにした宗門との「僧俗和合」に懸命な努力を重ねていきました。

宗門の僧侶たちが、僧の権威と伝統を保つことだけに汲々としていたのに対し、創価学会は人類の平和と幸福を願って、大聖人の誓願である広宣流布の達成を第一義としていたのです。広宣流布を使命とする活発な信徒団体の存在は、消極的で保守的な宗門にとっては、従来に従順な信徒像から大きくかけ離れたものであり、大変な脅威であったのです。

1970年代、80年代を通じて、学会の供養により、宗門の財政状態は極めて豊かになっていきましたが、世界的規模で発展を続けるSGIと池田先生に対する嫉妬心が極限にまで高まり、学会員を切り崩して寺側に付けようと企てる動きが顕著になってきました。

ついに阿部日顕法主らは、学会員を宗門に隷属させるために「創価学会分離作戦」(C作戦)を実行し、1990年12月、池田名誉会長を法華講総講頭から罷免すると通告してきたのです。更に、翌1991年11月、一方的に学会を「破門」という暴挙に出たのです。

その陰謀は失敗に終わりました。

宗門にとって最重要の事項は、「信徒と御本尊との間を取りもつために不可欠な仲介者が僧侶である」ことにあります。御書のどこにも見当たらない儀式や形式を強調することによって、信徒に僧への畏敬の念を抱かせ、従順させようとしたのです。とりわけ、法主に対する絶対的服従が信徒の信仰にとって最も重要であるかのように仕向けたのです。

それと対照的に、創価学会は、創価三代会長が身をもって示したように、御書を根本に、大聖人の御精神と教え通りに実践してきました。その勝利の実証は、「破門」以来、SGIは飛躍的な前進を遂げ、今や192カ国・地域でメンバーが嬉々として日蓮仏法の実践に励んでいる姿に如実に表れています。

以下、日顕宗の根本的な邪義を3点に要約して説明します。

## 日顕宗の3大邪義

### (1) 日顕宗の中心教義「法主信仰」

現宗門を、なぜ「日顕宗」と呼ぶのか。それは、日顕宗の教義が、法主を信仰の対象としているからです。

本来、法主とは、信行学の範となり、仏法を護持する存在でなければなりません。ところが、日顕宗が終始、主張しているのは、“法主は絶対であるから、ともかく法主に従え”という、一切の対話を拒絶して独善化を進める「法主絶対論」「法主信仰」です。

この法主信仰こそ、日蓮大聖人の仏法の三宝を破壊する大慢心の教義であり、日顕宗が最大の邪教と化した根幹の要因です。

たとえば、宗門の公式文書には次のようにあります。(宗門の機関誌に掲載された、いわゆる「能化文書」)。

「唯授一人の血脈の当処は、戒壇の大御本尊と不二の尊体にまします」「この根本の二つ(=御本尊と法主)に対する信心は、絶対でなければなりません」

これほどの前代未聞の邪義はありません。法主が大御本尊と不二の尊体であるとは、法主を絶対なるものとして礼拝し、信仰せよということです。これは、本来、御本尊をお守りする役割である法主が、その役割をわきまえず、尊極の法体である御本尊と同等の地位にまでのし上がった教義にほかなりません。

### 「御本尊根本」こそ正しい信心

日蓮大聖人は「此の曼荼羅能く能く信ぜさせ給うべし」(御書 1124 ㊦)、「無二に信ずる故によつて・此の御本尊の宝塔の中へ入るべきなり」(同 1244 ㊦)等と仰せです。

また、日興上人も「唯御書の意に任せて妙法蓮華経の五字を以て本尊と為す可しと即ち御自筆の本尊(=大聖人御自身が認められた御本尊)是なり」(同 1606 ㊦)と述べられています。

「御本尊根本の信心」こそが、大聖人・日興上人以来の正しい信心です。その御本尊に対して、法主を加えて「根本の二つ」とすることは、大聖人・日興上人のお心に背く邪義であることはいうまでもありません。

### 法主の絶対視は大聖人・日興上人に違背

「日興遺誠置文」には、次のようにあります。

「時の貫主為りと雖も仏法に相違して己義を構えば之を用う可からざる事」  
(同 1618 ㊦)

この遺誡は、たとえ法主であろうとも仏法から逸脱して、自分勝手な主張をする場合は、それを用いてはならないと断言されているものです。また、この仰せからうかがえるように、日興上人は、後代の法主が誤りを犯すこともありうると想定されていたのです。

この「遺誡置文」に照らしても、法主を絶対視することは、大聖人・日興上人に完全に違背した邪義であることは明白です。

## (2) 日顕宗の神秘的血脈の嘘

日顕宗で法主が絶対であるとする考えが生じているのも、もともとは、前提となる血脈観が誤っているかにほかなりません。

すなわち、前の法主から「血脈相承」を受けるだけで、仏の内証の悟り、法体が次の法主へ伝えられるとする“神秘的”な血脈観のことです。

先の「能化文書」には、「唯授一人の血脈法水は、まさに人法一箇の御法体です」などと記されています。

しかし、このような“神秘的”な血脈観も、後の時代の者が、法主の権威を主張するために作ったものであり、大聖人、日興上人の教えとは無縁の邪義です。

大聖人の仏法における血脈とは、本来、一切衆生に開かれたものであり、一部の者が独占するものではありません。

### 「血脈」の本義は万人に開かれた「信心」

大聖人御在世当時の日本仏教界では、「血脈」の名のもとに、ごく一部の閉ざされた人間だけに仏法の奥義なるものが伝わるとする「秘伝主義」が横行していました。

それに対して大聖人は、「生死一大事血脈抄」に「日本国の一切衆生に法華経を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめんとする」(同 1337 ㊦)と仰せになり、成仏の血脈は特定の人間のみが所持するものではなく、万人に開かれるものであることを明確に示されています。

そして、大聖人の仏法においては、「血脈」といっても、結論は「信心の血脈」という表現にあるように「信心」のことです。

これに対して、相承されれば、信心、実践と関係なく、そのまま仏であるとする日顕宗の特権的・神秘的相承観は、「信心の血脈」という血脈の本義を破る邪義以外のなにものでもありません。

### (3) 「僧俗差別主義」の時代錯誤

日顕および日顕宗の僧侶に共通しているのは、“僧が上で信者は下”という、信徒に対する抜きがたい「差別思想」です。

たとえば、日顕が平成2年(1990年)に学会を切ろうとした際に「20万こっちにつけばいい」と語っていたことは有名です。その20万というのは、自分たちが贅沢三昧する生活を続けるための人数です。こうした発言自体、信徒の幸福を全く考えていないことを物語っています。

言うまでもなく、こうした信徒蔑視の思想は、日蓮大聖人の仏法に存在するわけがありません。

大聖人は「此の世の中の男女僧尼は嫌うべからず法華経を持たせ給う人は一切衆生のしうとこそ仏は御らん候らめ」(同 1134 ㊦)、「僧も俗も尼も女も一句をも人にかたらん人は如来の使と見えたり」(同 1448 ㊦)と、明確に僧俗の平等を説かれています。

僧俗ばかりか、すべての人間の平等こそ法華経、大聖人の教えの根幹をなす思想です。仏法上の師匠と弟子の関係も、「師弟不二」の原理に示されているように、相互の尊敬と信頼のもとに、共通の責任と決意をもって広宣流布へ前進していくことを意味しています。

しかし、宗門では師匠とは単に事務的な立場や役職で決められ、信徒を意のままに扱う権威の象徴にすぎないのです。このように「僧俗差別主義」は大聖人の人間主義の仏法を冒瀆する時代錯誤の誤った思想なのです。

(*Living Buddhism*, March-April 2010, pp. 90-94, 大白蓮華 09年10月号)